

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター

セ ン タ ー 通 信

第 10 号
2016. 3. 25

平井隆太郎先生の思い出

戸 川 安 宣

一九六六年、ぼくは附属高校から立教大学に入学し、各クラブが新入生勧誘で列をなしている中を、只管ミステリクラブを探して廻った。だが一向に見当たらない。仕方がないのでこの頃知り合ったワセダ・ミステリクラブの人たちに唆され、自分で作る仕儀となる。学生課に聞くと、同好の士を五人集め、部付きの先生を一人決めてくれれば登録団体として認可するという。五人の名前を借りることは容易かったが、問題は顧問の先生だ。広報課の方から、そういうことならあの先生を置いていないと教えられたのが、平井隆太郎先生であった。江戸川乱歩のご息が立教におられ、しかも社会学部長だという。なんでも江戸の瓦版の研究がご専門とか。早速、学部長室を訪ね、ミステリクラブを作りたいが、顧問になつて戴けませんか、と恐るおそ

る何うと、腕組みし目を閉じて聞いておられた先生がぼつりと一言、「まあ、しょうがないでしょう」とおっしゃったのである。この一言、そしてそれをおっしゃったときの先生の姿は目に耳に焼き付いて、半世紀経った今でも忘れることができない。以後、なにか承認を得るための書類に判を戴く時などに、屢々学部長室を訪れ、稀には大学に隣接するご自宅に伺った。クラブの飲み会などにも、先生は気軽に出席してくださり、ゲームなどにも参加してください。SFをたまに読む、という話も伺った。最終学年の一九六九年には大学紛争の嵐が立教にも吹き荒れたが、この大変な時期に総長代理の業務を勤められたのが平井先生だった。学部が違うので、授業を受けたことは一度もなかったが、先生はゼミの冒頭にその日の課題を提示すると、教壇の

椅子に腰を下ろして学生がなにか答えるまで腕を組み目を閉じて、一言も喋らない。学生はいたたまれない気持ちだったという。これは多分に誇張されて伝わったエピソードのような気がする。少なくとも、ぼくが接した先生はいつもにこにこ笑顔を絶やさず、いちいちこちらの同意を求めるように「すすよね」と言つて、愉しそうに笑われるのが常だった。卒業後、探偵小説専門誌『幻影城』からの依頼で乱歩の少年ものについて纏めることになり、それまで読んでいなかった知恵の太郎ものなどを読みたいと先生にお頼りしたところ、貸すことはできないが家に来て読むのなら、と言つて下さった。そこで何日か先生のお宅に伺つて、雑誌や本を閲覧させていただいたのだが、何うとまず和服姿の婦人が現れた。先生のご母堂で乱歩夫人の隆さ

りである。乱歩蔵書を見るにはまず夫人にご挨拶する、というのがルールだったのか、以後、何うたびに隆夫人とお目にかかることになった。ご挨拶が済むと、やおら口を開いてご主人、乱歩さんの思い出を話し始める。それがほとんど愚痴、であった。締切の朝、編集者が原稿を取りにやってくるができていない。乱歩さんは書齋から出てこない。〇〇社の△△さんがいらしてますよ、と取り次ぐと、まだできていないから帰ってもらえ、という。しかしたなくそう伝えて、ひとまず引き取ってもらおうのだが、次の日もとなると、いやですよ、ご自分で出て、そうおっしゃってください、と言うと、それならおまえが書いてみる、とこうなんだから、ごさいますよ——といった具合だ。あるいは、戦前、乱歩さんの作品が世間でエロ、グロ、ナンセンスの代表のよ

目 次

平井隆太郎先生の思い出

戸 川 安 宣

「没後二五年 日影丈吉と雑誌「宝石」の作家たち展」開催に至るまで

谷 口 朋 子

「戦後池袋―ヤミ市から自由文化都市へ―」報告

落 合 教 幸

〈資料紹介〉

江戸川乱歩「魔術師」

落 合 教 幸

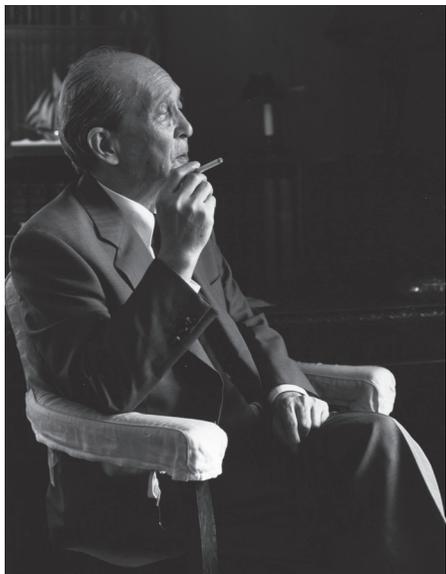
〈編集後記〉

うに言われていた、というのを、世間では主人の作品を「ボルノ、ボルノ」と言うんでございますよ、とおっしゃっていたのが忘れられない。ひとしきり隆夫人のお話が終わると、隆太郎先生の奥様が登場してお願いしていた本や雑誌などを持ってきてくださる。先生より先にお亡くなりになった奥様は、実に事務能力に長けた方で、また一度会った人は忘れない、という記憶力の持ち主でもあった。従って、本や書類など、どこになにかあるかをすべて熟知しておられ、たちどころに取り出してこられた。隆太郎先生が細かいことには頓着しない鷹揚な方であったのと、まさに好対照であった。このとき、応接間の机の上に載っている「貼

作品を出すようになって、何度か先生の許にお願いに上がった。そしてある日、ぼくは先生に『貼雑年譜』を復刻させていただけませんか、とお願いしてみた。そのときはすでに、講談社から江戸川乱歩文庫の別巻という形で初めの二巻分が一冊本の形で出ていたが、貼り込みなどをできるだけ原本通りに復元した完全な形で作りたいと思い、印刷製本の技術を結集して完成させた。二〇〇一年のことである。二〇一五年、乱歩の著作権が消滅するという年に、先生は九十四歳でお亡くなりになった。正に半世紀に亘るご交誼を賜ったことになる。隆太郎先生、本当に有難うございました。

戸川 安宣（編集者）

雑年譜」を見て、先生にお願ひし、中を見させていだいた。『探偵小説四十年』などでその存在を知ってはいたが、実物に接するのはもちろん初めてだった。おそろおそろ拝見して衝撃を受けた。その後、東京創元社でも日本作家の



平井隆太郎名誉教授（応接間にて）